



説教要旨「お金はないけどなんとかなるさ」

使徒言行録3章1～10節

「生まれながら足の不自由な男」（2節）が、神殿の境内に入ろうとするペトロとヨハネに施しを乞うたことから物語が始まります。男に声をかけられたペトロとヨハネは、彼をじっと見た上で、「わたしたちを見なさい」（4節）と言います。ペトロが、「わたしには金や銀はない」（6節）と知っている以上、彼の目に映るペトロらの身なりは、とても裕福そうには見えなかったでしょう。それどころか、みすぼらしいと感じるような身なりだったかもしれません。

さらに言えば、ペトロたちのみすぼらしさは、外見だけのことではありません。ペトロは、「主よ、ご一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」（ルカ 22:33）とまで言った舌の根の乾かぬうちに、「わたしはあの人を知らない」（ルカ 22:57）と言って保身に走り、イエス様を裏切り、見殺しにしたのです。

それは誰かに誇れるような、見栄えのいいありようでは決してありません。むしろ誰にも知られたくない、恥ずかしくて隠しておきたくなるような姿です。ペトロは、そんな惨めで情けない自分たちのことを見つめるようにと、促したのです。

見ての通り、わたしには金や銀はない、あなたの期待するものを持っていない、と告げるとともに、ペトロは「もっているものをあげよう」（6節）と告げ、「イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と命じて、彼の右手をとって立ち上がらせたのです。ペトロがこの男の足を癒やしたわけではありません。ペトロは、イエス様の名によってこの男の癒やしを願ったのです。イエス様はその願いをかなえてくださったのです。『大丈夫、きっとイエス様がなんとかしてくださる』。そんな、ペトロの声が聞こえてくる気がします。

なんの力も持たない、みすぼらしく惨めで情けない姿を、隠すことなく、取り繕うこともなく、「わたしたちを見なさい」と告げること。それは、こんなにもみすぼらしく惨めで情けない自分であっても、神様は見捨てず、救いに入れられたという、神の恵みを証しすることなのです。